

展望'95年

御室流の躍進が課題

宗務事務の効率化目指す

御室派

古義真言

兵庫県南部地震では同派の末寺並びに華道人も多大な被害を受けた。同派では直ちに総務部に災害対策係を設置し、役職員が被災地を訪れ、見舞いと現状視察を行なった。同時に、全末寺に被災寺院に対する義援金を呼びかけている。義援金は二月二十日までに本山に集められ、各寺院へ贈られる予定。

一方、仁和寺としては地元新聞社を通じて、被災者に対する義援金百万円を寄託している。

被災末寺と華道の救援

大覚寺派

同派の今年は、大覚寺に総司所を置く嵯峨御流華道の神戸司所の新年会が神戸市中央区のホテルで開かれた翌日（一月十七日）に、未曾有の大災害である兵庫県南部地震が起きるという厳しいスタートとなった。新年会には上井寛圓大本山大覚寺門跡（同派管長）と岡田高功事務長（同派宗務総長）も出席していた。

同派では直ちに電話等で連絡を取りながら現状を把握した後、職員らを被災地へ派遣し、見舞いを行なった。また、近畿教区の青年教師などが中心となって被災者に対するボランティア活動も行なわれている。一方、同派では全末寺と全華道司所に義援金を呼びかけるとともに、華道と宗派合同の被害対策会議を近日中に開く予定。

今回の震災は末寺の被害も多大なものがあつたが、特に神戸司所は嵯峨御流の中でも大きな司所の一つで、同流の今後にも少なからず影響を与えそうだ。

さて、宗派、本山、華道、学園の先頭に立つ、上井門跡は九十歳を迎えたが、正月の後七日御修法を無魔勤めるなど健康そのもので精力的に全国各地を巡錫し、同派、華道に明るい話題を提供している。

二期目に入った岡田内局の当面の課題は、兵庫県南部地震で打撃を受けた末寺、華道の救援と立て直しにかかっているといえよう。

また、「心経と華」の本山である大覚寺にとって嵯峨御流華道とともに車の両輪である心経写経運動の積極的な展開も忘れてはならないことだ。

平成の大修理第三期始まる

泉涌寺派

昭和六十三年から始まった同派総本山泉涌寺（小林海暢長老）最大の事業である平成の大修理は、第二期工事が

予定通り順調に進捗し、方丈後部の改築、前部分の修理が一昨年末に完成した。その他、海会堂、勅使門、大玄関、台所門、塀重門、中仕切塀、霊明殿間聴部屋、妙応殿の修理も終わっている。

第三期工事は京都の建都千二百年記念の諸行事との関係上、同寺への参拝者が増えることが予想されたため、昨年一年間は休止していた。そのため、御座所の修理、開山堂と大門の屋根の葺き替えなどの第三期工事は、今年に入り再開した。川村俊朝寺務長（同派宗務総長）は「全ての工事については平成八年度中にめどをたてたい」としている。

また、泉涌寺では昨年創流六十周年を迎えた月輪末生流の教化誌を発行する計画も進めている。

兵庫県南部地震については同派末寺の被害はなかったが、京都仏教会に属する泉涌寺は同仏教会を通じて百万円を拠出した。同仏教会では他の寺院の拠出金も合わせて合計五百五十万円を日本赤十字社京都府本部へ募金を寄託した。泉涌寺では、長期的な取り組みとして今後も同仏教会を通じて災害救援募金活動を続けていく方針。